

ヘブル人への手紙9章11-12節 「聖所に入る」

1A 主の住まい

1B エデンの園

2B 幕屋から天のエルサレム

2A 身勝手な献げ物

1B 自分のやり方

2B 犠牲なき宗教

3A 御名の栄光

1B 語られるところ

2B 御名を置かれるところ

3B 祈るところ

4B 栄光の輝くところ

4A 天の聖所

1B 天から来られた方

2B 肉体の垂れ幕

3B ご自身の血

4B 永遠の贖い

本文

ヘブル人への手紙 9 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、先々週で 8 章まで来ていました。今日は、9 章全体を一節ずつ見ていきたいと思います。今朝は、11-12 節を読んでみたいと思います。「¹¹しかしキリストは、すでに実現したすばらしい事柄の大祭司として来られ、人の手で造った物でない、すなわち、この被造世界の物でない、もっと偉大な、もっと完全な幕屋を通り、¹²また、雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自身の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました。」

私たちは前回、契約について学びました。そもそも、聖書は、何を書いているのか？ということをお話しました。ご自分の似姿に造られた人が、神の言われることに聞かないで罪を犯して、離れていったので、神は何とかしてご自分のもとに戻そうとされている話なのだとしました。その時に、ご自分の一方的な約束で、人と結ばれたのが契約です。モーセによって結ばれた契約については、イスラエルの民が破ってしまったので、主は、その契約を一新して、ご自身の圧倒的な恵みで結びなおしてくださったのが、新しい契約です。イエス様がそのために血を流されて、その契約を有効にされた、ということです。

1A 主の住まい

そして今回は、今朝は、神は元来、ご自身の造られた人に対して、何を願っておられるのか？について、見ていきたいと思います。

1B エデンの園

主が願われていたのは、アダムとエバを造られたところを思い出すと分かります。エデンの園です。「創世 2:15 神である主は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。」主は、アダムに園を耕し、守られることを命じられています、その園の中に彼がいることを願われていました。いつも主がしておられたことを、創世記 3 章 8 節で見ることができます、「そよ風の吹くころ、彼らは、神である主が園を歩き回られる音を聞いた。」主は、歩き回られていました。これは、ご自身が造られた者たち交流するためです。触れ合うためです。共にいるためです。アダムが罪を犯してしまったために、主なる神は二人を園から追放しなければいけませんでした、主の願いは、いつも人がご自身のところにいることを願っておられたのです。つまり、主は、人に対して共におられる、間に住まわれることを願っておられるのです。

人は、神と共にいるように造られています。そして、神にあって、他の人たちと共にいるように造られています。人は何をしているか？ということも大事ですが、それ以上に大事なものは、どこに居るのか？ということ。私は日本社会が、病んでいる、いや、罪を犯していると感じることがあります。アマゾンのサイトで、出版されている本で「孤独」を検索にかけました。すると、なんと孤独がいかに良いものであるかを勧め、励ますものが、ずらりと並びます！孤独がいかに人というもの、そのいのちを殺すのか知れないのに、そのことをむしろ、勧めているのです。人と人がつながることを、極端に恐れます。これは、まさに罪の結果なのです。アダムが、神と共にいることを拒み、神から隠れたため、それでエデンの園を離れなければいけなくなった結果なのです。

2B 幕屋から天のエルサレム

しかし、主なる神はそのように人を造られていません。アダムの子孫に対して、何とかしてご自分のもとに引き戻そうとします。アブラハムを主が選ばれ、召し、イサクが生まれ、ヤコブが生まれてから、十二人の息子が生まれて、それでイスラエル人が増えました。彼らをエジプトから連れ出し、主が行われたのは、幕屋を造れということでした。

主は聖なる方です。シナイ山に天から降りて、神が現れましたが、彼らはその姿が恐ろしくなりました。彼らには罪があり、聖なる方に近づけば死んでしまうことを知っていたからです。それで主は、それを幕で仕切ったご自分の住まいを造りなさいと命じられたのです。それが、幕屋です。彼らは荒野の旅をしていました。ちょうど、遊牧民が天幕の移動生活をしていたように、移動することのできるように、幕を張って、その中にご自身が住むと言われました。彼らにそのまま現れると、彼らが滅んでしまうので、主は祭司を召し、選び、彼らが代わって、ご自分のおられる所、聖なる所に入

ることができるようにされました。イスラエルの民のいけにえを受け取って、その流された血によって、彼らの間に住むことができるようにしてくださったのです。

みなさんが、イスラエル人として荒野の旅にいらっしゃると思ってください。宿営する時に、朝、起きると、その真ん中に、雲の柱が立っています。幕屋の上に雲の柱があったのです。そして、夜が来ると、その柱は火の柱になります。自分たちの真ん中に、主がいつもおられることをそのようにして、感じ取ることができたのです。

そして、民が荒野の旅を終えて、約束の地に入れば、彼らは安らかにそこに定住することを約束されていました。そして、主はご自分の住まわれるところを定められました。それが王ダビデによって示されて、モリヤ山の上でした。アブラハムがかつて独り子イサクを全焼のいけにえとして献げようとした所です。そこに、ダビデの子ソロモンが神殿を建て、主が現れるようにされました。

時を経て、キリストが来られます。使徒ヨハネは、大胆にこう宣言しました。「ヨハ 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」ここに、私たちの間に住まわれた、というのは、直訳では、「私たちの間に幕屋を張られた」というものです。神が人となられたこと、そして私たちの間に住まわれたこと自体が、まさに神の幕屋が私たちの間に張られたことそのものなのだ、ということです。イエスご自身といることが、神と共にいることになったのです。

そして、主は十字架につけられ、三日目によみがえり、天に昇られました。しかし主は、もうひとりの助け主、聖霊を私たちに遣わされます。聖霊が臨まれることによって、ご自身を現し、それで、今度は、聖霊によって私たち自身が神殿となります。「I コリ 3:16 あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。」信じる者たちひとりひとりに、主は聖霊を降り注ぎ、主の御名によって集まる時に、聖霊の賜物で私たちを満たし、それで主ご自身が住んでくださるのです。

今は、地上に、御霊によって教会を通して主は住んでくださいますが、やがて、天地は過ぎ去り、最後は新しい天、新しい地に変わります。そして、天におられる神が、その聖所と共に地上に降りてきます。天のエルサレムです。「黙 21:3 見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。」主の願いが、完全に満たされます。主が人々と共におられます。共に住みます。人々は神の民となり、神が人々の神となり、ともにおられます。

2A 身勝手な献げ物

ですから、主は、ご自身が共におられることを願っておられます。けれども、人は、自分自身の勝

手な思いによって、自分のやり方で生きればいいや、と思っていますね。例えば、日本において特徴的なのは、「軽い付き合い」です。キリスト教会において、週ごとに礼拝を献げることについて、私は、初めは抵抗がありました。なぜなら、礼拝行為というのは、年に一度、行えばよいものだと思っていたからです。年に一度、初詣をして、お賽銭を投げて、お願い事をすればその年は、それ以上の神々との付き合いはしなくてよい、と思っていました。ですから、週ごとに集まり、しかも、お賽銭どころか、献金を行うのですから、かなり、はまっていると感ずるはずですよ。

しかし、それぞれが自分のやり方で神と付き合い、大した犠牲もなく付き合うのであれば、そこには、どれほどの、「いのち」があるのでしょうか？私が話しているのは、肉体の生命ではなく、本質的な、人間が生きていとされている、いのちのことです。永遠のいのち、霊的ないのちです。今の時代は、なるべく自分が損しない方法で、そつなく生きていくことが最も大事にされています。それによって犠牲になっているのは、一人一人のいのちなのです。それを犠牲にして、何のために生きているかがわからなくなっています。

1B 自分のやり方

聖書は、このような自分のやり方で神に付き合いおうとする例を示されました。「カインの道」です。アダムからカインが生まれ、それからアベルが生まれました。「創 4:2b-4 アベルは羊を飼う者となり、カインは大地を耕す者となった。しばらく時が過ぎて、カインは大地の実りを【主】へのささげ物として持って来た。アベルもまた、自分の羊の初子の中から、肥えたものを持って来た。【主】はアベルとそのささげ物に目を留められた。」

カインは、自分が大地を耕す者であって、その行いの実をそのまま神に献げました。これは、「俺は俺のやり方がある。だから、そのやり方をしっかり貫けば、人生十分なのだ。」というものです。自分の人生、いのちを支配されている神について、考慮しない生き方です。

2B 犠牲なき宗教

そして、弟アベルのささげ物について、「自分の羊の初子の中から、肥えたものを持って来た。」とあります。初子は初めに生まれた雄です。まさに自分の分身のような存在です。自分の最も良いわけ前です。それが主のものであることを認めることです。つまり、自分自身を、すべて主なる神に明け渡すことを意味しています。それをカインはしていませんでした。神と軽い付き合いで済ませたかったのです。

神の人に対する付き合いは、真剣です。真実な愛です。軽々しいものではありません。アダムとエバの恥をかくすために、皮の衣を与えられました。一つの家畜のいのちが犠牲となりました。このことによって、彼らに近づくことができるようにされたのです。そして、その神の犠牲の方法に対して、アベルは応答したのです。自分勝手な方法ではなく、主ご自身の方法で近づきました。

しかし、今の世情は真逆を行っています。最近ニュースで、「人間関係リセット症候群」という言葉が聞きました。LINE など SNS で付き合いしてきた友達関係を、一度、リセットするとのこと。自分のアカウントを捨てて、新たなアカウントを造るということです。そんなこと、人間関係でするでしょうか？真実な愛は、夫婦のような一生ものです。親子のような、一生ものです。切っても切れないものです。

主はだから、ご自分の独り子をいけにえとして献げるというような、とてつもない犠牲を払ってくださったのです。主はまさに、ご自身を捨ててくださいました。そこまでの愛であり、交わりなのです。だから、私たちがその愛を受け入れる時には、その感謝から、自分自身のすべてをこの方に明け渡したいと願うのです。そして、女が男に結ばれるように、キリストに結ばれて生きるのです。そこに、いのちがあるのです。

3A 御名の栄光

ところで、主が住まわれるということについて、一つ疑問が浮かぶでしょう。それは、天地を造られた方は、どこにでもおられるはずなのに、どうして一定のところに住むと言われるのか？ということです。確かにソロモンが、神殿を建てた後、奉献式をする時にこう祈りました。「Ⅰ列王 8:27 それにしても、神は、はたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして私が建てたこの宮など、なおさらのことです。」天地を造られた神は、天の天も入れることはできません。神殿については、なおさらのことです。

それで、多くの人が勘違いしています。「神はどこにでもおられるのだから、別に教会に来なくていいではないか？一定の物理的な場所に収まらない方だ。自分が神につながっているから、大丈夫なのだ。」もちろん、主はあらゆるところにおられる方です。そして、たった一人でも、主の御名を呼び求めれば、そこにおられます。しかし、主は、それでも、ご自分の名によって集まるところに、住むと宣言されるのです。「マタ 18:20 二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。」

1B 語られるところ

では、主はなぜ、一定のところに住むと言われるのでしょうか？それは、第一に、主がそこから語ってくださるということです。モーセが、幕屋にあるものを造るように主に命じられましたが、十戒の石の板を入れる、契約の箱を造るように命じられます。その次に、その箱の上に、「宥めの蓋」を造るように命じられます。それは、純金で造り、ケルビムを両端に彫るように命じられます。そして主が言われます。「出 25:22 わたしはそこであなたと会見し、イスラエルの子らに向けてあなたに与える命令を、その『宥めの蓋』の上から、あかしの箱の上の二つのケルビムの間から、ことごとくあなたに語る。」宥めの蓋の上は、主の御座を示していました。主はそこから、ことごとく、ご自分のことばを語られます。

主は、生きている神です。この方は語られます。偶像は、目があっても見ることができず、耳があっても聞くことはできず、そして口があっても、語ることはできません。コリントの人たちにパウロは、「I コリ 12:2 あなたがたが異教徒であったときには、誘われるまま、ものを言えない偶像のところに引かれて行きました。」と言いました。しかし、私たちの主は語られます。聖霊によって、一人一人に教えてくださいます。私たちは、このことを求めて、教会に来るのではないのでしょうか？ 賛美をし、祈り、そして、聖書のことばを聞いて、主がこう語られたという、はっきりとした確信を得るのではないのでしょうか？ これこそが、主が神殿においてなさることなのです。

2B 御名を置かれるところ

そして、どのように主が住まわれるのか？ 第二に、「ご自分の名を置く」ことにあります。主が、モーセによって、こう語られました。「申 12:5 ただ、あなたがたの神、【主】がご自分の住まいとして御名を置くために、あなたがたの全部族のうちから選ばれる場所を尋ねて、そこへ行かなければならない。」ご自分の住まいとして、後にエルサレムを選ばれますが、そこに御名を置くと約束されました。これは、どういうことか？ 聖書の時代、名は、その人の本質を示します。その人そのもの、その名誉や尊厳、あらゆるものが、名の中にあります。

モーセが、天幕で、主と語り合っていた時に、彼はこうお願いしました。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」主は言われます。「出 33:19 わたし自身、わたしのあらゆる良きものをあなたの前に通らせ、【主】の名であなたの前に宣言する。わたしは恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」神はご自分の栄光を見せるために、ご自身の名で宣言すると言われます。そして、その名が、次のものです。「34:6-7【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神。怒るのに遅く、恵みとまことに富み、恵みを千代まで保ち、咎と背きと罪を赦す。しかし、罰すべき者を必ず罰して、父の咎を子に、さらに子の子に、三代、四代に報いる者である。」こんなにも長い名なのです。しかし、そこに主の本質、その根っこにあるご性質が示されたのです。

主は、このようにして、ご自分の名を神殿にて、明らかにされます。私たちが集まる時には、イエスの名が明らかになります。あがめられます。私たちが、一人で、聖書を読んでイエス様のすばらしさが分かることはありますが、私たちが、この方の名によって集まる時に、主はご自身を明らかにしてくださるのです。そのようにして、私たちの間に住んでくださるのです。

3B 祈るところ

そして、第三に、神殿は祈るところです。ソロモンは、神殿奉獻式の時に、先ほど言いましたように、天の天も、神を入れることはできないと告白しました。では、何のために神殿を建てたのか？ こう言いました。「I 列王 8:29-30 そして、この宮、すなわち『わたしの名をそこに置く』とあなたが言われたこの場所に、夜も昼も御目を開き、あなたのしもべがこの場所に向かってささげる祈りを聞いてください。あなたのしもべとあなたの民イスラエルが、この場所に向かってささげる願いを聞

いてください。あなたご自身が、あなたの御住まいの場所、天においてこれを聞いてください。聞いて、お赦してください。」祈りを聞いてくださいとお願いしています。主が、私たちの願いを聞き、それに答えてくださるという時に、私たちは、主が自分たちの間に住んでくださることを実感します。

私たちは一人一人が、それぞれのところで主に祈ることはとても大切です。けれども、共に主の名で集まっている時に、心ひとつにしている祈りを、主は共におられて聞いてくださいます。「ヨハ 16:23 その日には、あなたがたはわたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしの名によって父に求めるものは何でも、父はあなたがたに与えてくださいます。」主が祈りを親しく聞いてくださるという喜びにあずかることができます。

4B 栄光の輝くところ

そして第四に、主は、ご自分の栄光を満たすことで、神殿の中に住んでくださいます。モーセが幕屋を建てた時に、そこに栄光の雲が満ちました。「出 40:34-35 そのとき、雲が会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。」そして、ソロモンが神殿を建てた時も、同じです。「1列王 8:10-11 祭司たちが聖所から出て来たとき、雲が【主】の宮に満ちた。祭司たちは、その雲のために、立って仕えることができなかった。【主】の栄光が【主】の宮に満ちたからである。」このようにして、主の栄光で満ちるのです。私たちは、イエスご自身の栄光を聖霊によって示されて、この方の前で圧倒され、ひれ伏すとき、主が住んでくださっていることを知ります。

4A 天の聖所

これでいかに、神が私たちと共に住みたいと願っておられて、イエス・キリストにあって神は住みたいと願われているかを見ることができたと思います。ここヘブル書では、地上の幕屋では、神が共に住まわれることを完成できなかったことを、イエス様が完成されたことを教えています。

1B 天から来られた方

まず、「人の手で造った物でない、すなわち、この被造世界の物でない」幕屋であると言っています。これは、地上で人の手で造られたのではなく、天そのもののことです。主が天に住まわれている、その聖所のことを指しています。私たちが、主に礼拝を献げる時に、天に触れているということ、主の御座そのものに、御霊によって触れているのだということです。私たちが天に対する希望を持っていますか？イエス様は、山上の垂訓で、天の御国を語られました。心の貧しい者は、幸いである、なぜなら、天の御国はその人のものだからだ、と言われました。

2B 肉体の垂れ幕

そして「もっと偉大な、もっと完全な幕屋」とあります。天における幕屋のことですが、そこに入られて、父なる神の御前のところまで行きました。地上の幕屋では、祭司たちが聖所と呼ばれるとこ

ろで、燭台に火をともし続けるために油を注いだり、週ごとに、机の上の臨在のパンを取り替えて
りしていました。けれども、年に一度だけ、大祭司一人で、垂れ幕を通して、イスラエルの罪のきよ
めのために血を携えて至聖所に入ります。イエス様がなされたのは、天における至聖所、主なる
神の御座のところに入られたということです。

ヘブル 10 章 20 節には、「**ご自分の肉体という垂れ幕を通して**」とあります。イエス様は、十字
架につけられ、死なれた時に、エルサレムの神殿に異変が起こりました。「**マタ 27:51 すると見よ、
神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。**」真っ二つに神殿の垂れ幕が上から下に裂けたの
です。キリストが肉体において人々の罪を背負われたことによって、これまでご自身の御座とその
外を仕切っていた垂れ幕を裂かれました。もはや、その裂かれたからだによって、私たちは父なる
神のところに、大胆に近づくことができるようになったのです。

3B ご自身の血

そして、「**雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって**」とあります。これまでは、数
千の、数万の牛ややぎ、羊の血が流されました。しかし、それでも人々の罪を除き去ることができ
ませんでした。しかし今、神の御子ご自身の流された血によって、それが父なる神の前に献げられ
て、それで、私たちを、内側から、良心から清めてくださったのです。

4B 永遠の贖い

そして最後に、「**ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました。**」と言っています。
これがすごいことです。これまでは、完全を指し示していましたが、完全に到達していませんで
した。ですから、いつまでもいつまでも、何度も、牛や羊、やぎのいけにえが献げられていました。け
れども、主キリストは、これをただ一度で行われたのです。天にある聖所に、ご自身の血を携えま
した。それで、贖いが完成したのです。永遠の贖いです。

もう、効力を途中で失うような贖いではないのです、永遠なのです。私たちは、なんと幸いなこと
でしょう！永遠に救われました！もう、主の御手から決して離れることはありません。この方と永遠
に共にいるのです！この、キリストにある神に愛から、私たちを引き離すものは何一つないの
です！だからこそ、みなさん、かの日、イエス様が再び戻ってこられる日まで、怠ることなく、この方
の名によって集まりましょう。祈りましょう。声一つにして賛美しましょう。しっかり、信仰と希望を保
って、愛に満たされて、残された地上での日々を歩んでいきましょう。